

センター のびん

No.70



ひと言

二人の思いを深く刻む

高橋 達郎 (センター運営委員)

目次

ひと言	高橋 達郎	1
なぜ運動部活動で「体罰」が起こるのか ～これまでの歴史と、これからの展望～	神谷 拓	2
被災地の今とこれから 座談会から1年、看護師をめざして	山本 優莉	7
仮設住宅でのお話から考えたこと	筒井 潤子	12
山下美咲さんに聞く あの手紙で私の書きたかったこと		14
フォーラム「成績ってなんだろう」	須藤 道子	16
「高校生公開授業」報告 新しい世界の発見 新しい自分の発見	千葉 建夫	19
石田一彦先生を悼む	田中 武雄	20
「戦後教育実践書を読む会」第4回の報告 「村を育てる学力」と出会って	佐藤 正夫	21
わたしの出会った先生 2 K先生のこと	日下 幸子	23
本の紹介		24
センターの動き		24

今年2月17日、NHKが『証言記録・東日本大震災〜高台の学校を襲った津波〜』を放映した。「高台の学校」とは南三陸町立戸倉中学校。そこに私の友人、猪又聡君が勤めていた。映像には、小雪の舞う中、登校坂のところまで住民の避難誘導に当たっていた猪又君の背中と、上がってきた津波に気づき、振り向き走り出す猪又君の顔と姿が一瞬大きく映し出される。その後、猪又君の必死の声が響く。「山が上がって! 山、上がって、山!」「グランドまで来た! グランドまで来たよ!」

校庭に避難してきた老夫婦を見つけ、助けに引き返す。そして津波に……。

3月2日、宮城県教職員組合編『東日本大震災・教職員が語る子ども・いのち・未来』(明石書店)の執筆者に感謝する会が行われた。石巻市立大川小学校で夫・祐一先生を亡くした佐々木芳美先生が心境を語った。「く原稿を何回も頼まれたのですがずっと書けずじまいでした。このまま書かなくていいのかという葛藤のなか、使命感みたいなもので頑張って文字にしました。今でも正直なところ読み返すことはできません。子どもたちを救えなかった主人の思いを思うと、なんと言っているのかよくわからないのです。私には何ができるのか一生懸命考えているつもりです。」

猪又君の声と祐一さんの思いを深く胸に刻む 2年目の3月11日。

なぜ運動部活動で「体罰」が起こるのか

〈これまでの歴史と、これからの展望〉

神谷 拓

1. はじめに

昨年末、大阪市にある公立高校の運動部活動で、顧問による体罰を苦にして、部員が自殺をしました。体罰をした教師は、その理由を「気合いを入れた」「気持ちを発憤させたかった」と述べたと報道されています。このような事件は、過去にも見られます。80年代には、岐阜県の運動部員（高校生）が、「叩かれるのももうイヤ、泣くのももうイヤ」という遺書を残して自殺をしています。この事件においても、体罰をした教師は「精神面における厳しい指導をした」と述べています。本稿を読んでいる人の中にも、精神教育や道徳教育という建て前で、体罰を受けた人がいるのではないのでしょうか。それにしても、なぜ、運動部活動では、このようなことが繰り返されるのでしょうか。以下では、これまでの歴史をふりかえりながら、その問題について考えていきたいと思います。

2. 運動部活動のはじまり 〈道徳教育とスポーツの結合〉

日本のスポーツは、戦前、大学の中で始められました。そのこともあり、運動部活動も大学の中で発足され、1877年には東京大学にボートクラブがあったと言われています。その後、他の大学、そして、高等学校以下にも広がっていきました。しかし、学校でスポーツや運動部活動を実施するためには、理由が必要でした。諸外国のように、地域でスポーツに取り組まれ、文化として根づいている場合には、スポーツをする特別な理由は必要とされず、「やりたいからやるだけ」と答えることでしよう。しかし、学校からスポーツが始まった日本の場合、教育的な理由が必要とされたのです。

その際に注目されたのが、「心の教育」、つまり道徳教育のために運動部活動を行うという考え方でした。その特徴を端的に述べれば、「子どもの心は態度に表れるのだから、態度を矯正することによって心を正していく」というものでした。このような

態度に基づく心の評価は、教師（上級生）にとつて、とても便利なものでした。なぜなら、態度の善し悪しは、教師（上級生）が主観的に判断でき、自分に従順な態度をとるまで、いくらでも難癖をつけることができたからです。しかも、それは道徳教育という「後ろ盾」をもっていたので、体罰を用いた態度の矯正も、「心や精神の教育」として是認されていきます。指導を受ける側の子ども達は、教師（上級生）に心や人格を否定されないように、そして、殴られないように、従順な態度を取るしかなかったのです。

このような指導は、第二次世界大戦に向けて国際情勢が緊迫化するなかで、さらに重視されていきました。皇国民である教師と子どもには、「戦争で死ぬかも知れない」という不合理を受け入れる上で、国家に対する従順さが不可欠だったからです。学校は、そのような従順な皇国民を育成する機関と化し、運動部活動を始めとする教育活動において、「心や精神の教育」が徹底され、体罰が横行するようになったのです。

3. 戦後の運動部活動と道徳教育の再要請

戦後も、運動部活動における道徳教育の要請は続きました。60年代以降、経済界から「規律ある労働者の育成」が学校に求められるようになります。そして、その影響を受けて、1977年改訂の学習指導要領では、特別活動における道徳教育が重視され、部活動も道徳と関連づけて指導することが求められます。その結果、戦前の「子どもの心は態度に表れる」という考え方が、再び注目されるようになり、校則や体罰で子どもを管理する教育が実践されるようになりました。冒頭でふれた、岐阜県の運動部員の自殺も、このような社会状況の下で発生したものでした。しかし、80年代に首相であった中曽根康弘は、とりわけ愛国心を始めとする道徳教育を重視していました。その姿勢は、当時発足された、臨時教育審議会の議論に影響を及ぼすことになり、その後も運動部活動が道徳教育の場として期待されてきました。

このようにして、「道徳教育のための運動部活動」は戦後に継承されましたが、問題はさらに深刻化してしまいました。戦後の一時期は、運動部活動の参加する対外試合が規制されていました。「中学校は近隣校との対外試合に限る」というようにです。これは、戦前から対外試合をめぐる運動部活動が過熱化していたので、その反省に基づいて設けられたものでした。しかし、そのような規制は、競技団体の要請を受けて徐々に緩和され、80年代には中学生の全国大会や、国体参加が認められました。また、同時期には、大会での競技成績が、内申書・調査書に記載されるようになり、進学と直結するようになっていました。内申書・調査書の手綱を握っているのは教師ですから、運動部活動で体罰が行われたとしても、子どもや親は逆らうことができません。そして、大会で高い競技成績を残し、希望する学校に進学するためには、「体罰もやむを得ない」と考えられるようになるのです。

4. 運動部活動の現在

今日の運動部活動は、これまで述べてきた歴史の延長線上にあります。そして、最近、話題になることの多い、運動部活動における体罰も同様です。

冒頭で述べたように、今日においても、体罰教師の言い訳は「精神の教育」「道徳教育」であり、その根底にあるのは「子どもへの心は態度に表れる」という考え方です。教師は、自分の意にそぐわない態度やプレーに対して、「精神の教育」「道徳教育」という建て前で子どもを殴り、子どももまた、「自分の『気合い』『精神』が悪いから殴られた」と信じるようになります。その結果として築かれるのが、教師に従順な態度です。このようにして、「体罰を受けたものは体罰を肯定する」という負のスパイラルが、今も形成されています。

さらに、進学のために競技成績を利用する傾向は、高校受験、さらには、中学受験にも浸透しています。そのレールに乗った子どもにとって、競技成績の高さが、その学校にいる存在価値・アイデンティティーとなり、大会で勝つことが至上目的化します。そして、たとえ体罰があつたとしても、辞めることは容易ではありません。競技成績の高さや、継続して競技を追求することが、入学を認められた1つの条件だからです。実際に、今回、事件のあつた大阪の高校（体育科）では、運動部に所属することが義務づけられていました³。彼らもまた、辞めるに辞められない環境に置かれていたのであり、体罰から逃げることはできなかったのです。

近年、問題はさらに深刻化しています。2000年代に進められた学校選択制度を見れば明らかのように、「各学校を競争関係に置くことが良い教育につながる」という方針が、各自治体で浸透しています。とりわけ大阪は、公立高校の統廃合も視野に入れて、学校選択制度の導入に前向きであり、緊張関係が続いています。学校を潰したくない校長は、定員を集めることに必死になります。そして、運動部活動の強豪校に育て、多くの入学者を呼び込み、さらに卒業後の進路まで決めてくれるような「運動部活動教師」を評価し、たとえ体罰があつたとしても、自分の手元から離そうとはしません。それどころか、そのような依存を背景に、今回のような体罰の問題が発生したときには、積極的な介入ができません。そして、そのように神格化された「運動部活動教師」を、他の教師は批判できなくなります。マスコミも今回の体罰事件を受けて、校長や教育委員会の「ぬるい対応」、体罰の傍観者であつた教師がいたこと、運動部活動の強豪校の教師が、長い間、学校を移動していない問題等を指摘していますが、その背景には、学校間の競争を重視した教育制度があるのです。

同様に、教員評価体制という要因も見過ごせません。中央教育審議会答申「新しい時代の義務教育を創造する」（2005年10月26日）において、「高い指導力のある優れた教師を位置づけるものとして、教育委員会の判断で、スーパーティーチャーなどのような職種を設けて処遇し、他の教師への指導助言や研修に当たるようにするなど、教師のキャリアの複線化を図ることができるようにする必要がある」と指摘されました。これを受けて、各自治体はその制度化に踏み切り、スーパーティーチャーとして認定する条件に「部活動の指導力」を挙げる所もあります。しかし、制度として機能しているとは言い難く、認定した教師が、運動部活動で体罰を繰り返していた事例もありました⁴。いずれにしても、「競技成績の高さ」や「結果」に依存した教員評価は、子どもの「推薦入試」における競技成績の評価と変わりません。今回の体罰事件を起こした教師も、「非常に厳しく指導して成績を挙げている」という評価を受けていたと報道されていますが、そのような結果・成績だけに注目するような教員評価体制が、体罰の問題（プロセスの問題）を見過ごす要因であつたことは、言うまでもないでしょう。

5. 運動部活動における体罰の構造的把握

さて、このような歴史や現状をふまえると、今回の体罰事件が「一教師による指導の問題」に止まらない、構造的な問題であることが明らかでしょう。「道徳教育のための部活動」「推薦入試」「学校間の競争」「教員評価」「対外試合体制」といった諸要因が絡み合っただけで発生しているのですから、これらにメスを入れない限り、問題の根本的な解決にはならないのです。そして、それを怠ってきたツケが、今、表面化していると捉える必要があるでしょう。少なくとも、今回の大阪の事件に関して言えば、元プロ野球選手を呼んで講演会を開いたり、元全日本の女子バレーボールの監督を非常勤講師として採用するというのは、「その場のぎ」の措置であり、問題の真相を力モフラージュする政治的なパフォーマンスに過ぎません。教育政策を通して、教師、子ども、親の道徳心に介入しようとしてきたのは誰なのか、各学校の競争を煽ってきたのは誰なのか、結果のみに注目するような教員評価体制を築いてきたのは誰なのか、そして「スポーツには体罰もあり得る」と言っていたのは誰なのか……。その批判的な検討なしには、問題の解決には至りません。マスコミも、これらの追求に躊躇している感があります。

そして、同様のまなざしは、国政にも向ける必要があるでしょう。2006年に新教育基本法が制定され、法律の中で道徳（心）について明記されました。これを受けて、各自治体でも教育基本計画が制定され、多くの場合、道徳心の育成が位置づけられています。さらに、翌年には学校教育法が改定され、「自主、自律及び協同の精神、規範意識、公正な判断力並びに公共の精神」といったことが明記され、改訂された学習指導要領の総則にも、「学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行う」と記されています。そして、部活動に関しても、「責任感、連帯感の涵養に資する」と記され、依然として道徳教育の役割が期待されています。

しかし、これまで述べてきたように、運動部活動における体罰は、道徳教育という「後ろ盾」を持っていました。今回の事件を受けて、国政でも運動部活動の改善策が検討されているようですが、その「後ろ盾」にメスを入れることができるのかに、注目する必要があります。もし、道徳教育をさらに推進することで、問題を解決に導こうとするのであれば、同じ事の繰り返しであり、問題はさらに深刻化するでしょう。

6. これからの運動部活動の在り方

最後に、これからの運動部活動の在り方に関して、私の考えを示して稿を閉じたいと思います。

まず、これまで述べてきたような運動部活動の状況を見て、「そんなに問題があるのなら、運動部活動を廃止して地域で行えば良い」という意見が出てくるかもしれません。実際に、教員免許取得に必要な「必修科目」に、運動部活動の歴史や指導論を扱う科目はありません。また、平日の部活動の指導には手当が支給されていません。これらのことをふまえると、運動部活動の指導が教師の職務であるのは、現時点ではグレーゾーンです。

しかし、私は運動部活動を廃止しても問題の解決にはならず、むしろ学校に位置づける論理を明確にして、その前提で条件整備を進めていく必要があると考えています。その理由の一つは、本稿でふれたように、日本のスポーツは学校を核にして広がってきた歴史や風土があるからです。実際に、これまで学習指導要領では、運動部活動の地域移行を試みたことが2回ありました

が(1969年以降、及び1998年以降)、ことごとく失敗しています。日本の歴史や風土を無視して地域移行に踏み切っても、うまく事は進まないのです。学校の運動部活動か、地域のスポーツクラブかという二項対立的な考え方ではなく、両機関の共存・共栄体制を築いていくことが、日本らしいスポーツ振興の在り方なのだと思います。

もう一つの理由は、スポーツの主人公を育てるといふ、学校体育の目的を実現するためには、運動部活動が不可欠ということがあります。学校を卒業したら、自分たちで施設を予約したり、役割分担をしたり、さらには科学的な練習計画を立てて、スポーツに取り組む必要があります。このような力は、体育の授業だけではつけることができず、教科外における「学校卒業後のスポーツライフに繋がる自治と科学を学ぶ場」が必要なのです。

ちなみに、ここで取り上げた「自治」という考え方は、体罰を克服していく上でも、不可欠なキーワードです。これまでの「道徳教育としての運動部活動」は、教師が子どもの態度を矯正することをもって、心や人格の教育と見なす点に特徴があり、結果として体罰を容認する「脆弱さ」を含んでいました。そのため、これからの運動部活動は、子どもが自治的に、主体的にスポーツに取り組んだ結果、人格や心が形成されるという「自己形成」の考え方に立つ必要があります。この視点が、これまでの「道徳教育としての運動部活動」に欠けていたのであり、それが「技術だけでなく、心や精神も俺が鍛えてやる」という、体罰教師の奢りを生じさせてきました。

しかし、このような運動部活動を実現するためには、教育行政による条件整備が不可欠です。具体的には、教師の職務とは言い難い「競技力向上」の指導を、地域で科学的、合理的に取り組めるように指導者、場所、予算などを整備すること、そして、先に述べたような運動部活動指導が可能となるように、教師の定数、手当、勤務時間、代休といった労働条件を見直すこと、さらには、運動部活動の歴史や指導の原理を学ぶ、研修の機会を設けること等が挙げられます。そして、子どもたちに自治を経験させるのですから、指導する教師集団の自治も保障されなければならないでしょう。教師自身が自治を経験せずに、子どもに自治を指導することはできないからです。

このような展望をもって、これまでの「道徳教育の場」から「学校卒業後のスポーツライフに繋がる自治と科学を学ぶ場」に向けてソフトランディングしていくことが、今、私たちに求められているのではないのでしょうか。

注

- 1 NHK取材班・今橋盛勝著『NHKおはようジャーナル 体罰』(日本放送出版協会、1986年、36頁)。
- 2 なお、これまでの運動部活動の歴史や課題については、雑誌『体育科教育』(大修館)における連載「運動部活動の教育学入門 これからの運動部活動の見方、考え方」(2011年4月から継続中)で検討していますので、ご参照ください。
- 3 『AERA』(2013年1月28日、17頁)。
- 4 朝日新聞朝刊 2007年9月16日、夕刊9月19日、朝刊9月21日。
- 5 朝日デジタル 2013年1月8日。

被災地の今とこれから

座談会から1年 看護師をめざして

去年、3・11から11カ月目の2月11日に石巻の高校3年生5人が集まってもらい、話を聞くことができました（通信66号掲載）。その時から1年経ちます。

座談会出席者5人のうちたたり石巻に残っているのが山本優莉さん（石巻女子商卒）です。

1月26日、忙しい毎日をおくっている山本さんに時間をとっていただき、その後のお話を聞くことができました。

以下はその報告です。聞き手は春日・清岡で、田中孝彦さん（武庫川大学）にも入っていただきました。（かすが）



—あなたたちに話を聞いて1年経ちます。石巻に今残っているのは山本さんだけなので、山本さんの話を聞きたかったのです。快く時間をとっていただき大変うれしく思いました。ありがとうございます。あれから卒業までどうでしたか。

仮設校舎での勉強自体がみんな初めてだったので、環境が全然違うという感じで。その戸惑いがみんなにあったと思うんですけど、でもそんなに変わらずみんな楽しくやれてました。

病院と学校の毎日

—お会いした時あなたは二つの面から看護師になろうと話していましたね。一つは、未熟児で生まれて病院でいろいろみんなにお

世話になったこと、もう一つは、震災にあつて避難所でのいろんな医療の人たちの仕事を見たことでした。この希望に向かってまっすぐ進んでいるということですね。今は病院にも行き、学校にも行っている。病院は？そして、そこを選んだ理由は？

こだまホスピタルというところです。すごく近いです。個人病院なんですけど入院患者さんもいます。

私は働किながら学校に通つて地元に残りたいという気持ちが一番あつたので、学校に通いながら働ける病院となると、やっぱりその病院が一番いいなというのがありました。あと自分の曾祖父なんですけど、その病院に入院していたことが一時期あつて、何回か見舞いとかにも行つてたんです。

まだ幼かつたんですけど、その看護師さんの笑顔とかすごい印象があつたんです。なので、働きたいなと思つて、その病院を希望しました。

—今行っている学校は？ 病院の了解のもとで学校に行つてるわけですよ。

学校は石巻市医師会附属看護学校です。最初学校に行きたいと思つて、でも働किながら学校に通えるというのがわかつて、じゃあ働こうと思つたんですよ。最初にその病院を受けて、学校も考えているのでというのをちゃんとお話しして了解を得て、あと受験させて頂きました。

—あなたの一週間はどのようなふうになつてるの。

朝はだいたい7時前、6時40分とか50分くらいには家を出て仕事場に行きます。行つたら、朝の外來の処置センターの準備とか診察室の準備をしたあとに、外來と病棟とデイケアというところがあるんですけど、一週間ごとローテーションで廻つて働きます。外來では、カルテを出し入れしたり、患者さんの名前を呼んで誘導したりというのが主な仕事です。病棟に行くとおムツ交換、排泄援助だったりとか、あと飲水と言つてお茶を飲んでもらえるように促して、あと食堂の準備をしたりとかですね。

デイケアというところは、社会復帰というか日常生活をちゃんと送れるように援助をしていくところで、創作活動だったりとか運動、バレーボールだったりとかを主にやつてるところです。

午前中は働किながら11時45分にあがつて、

ご飯を食べてすぐ学校に行きます。12時ぐらいには「行ってまいります」と言ってお出て、あとは学校で5時まで勉強してまた病院に戻らなくてはいけないので、もどってタイムカードを押して「お先します」という感じです。

早く帰ったときとか、外来がまだ終了していないとちよつと手伝ったりします。

土日は休みだったんですけど、土日の出勤も来月から。あと当直とかも三月あたりから入ります。

だんだん最初に比べれば慣れては来たんですけど、でもまだ自分の中では完璧じゃないです。

もうちよつと余裕を持つてできるんじゃないかなという思いでした。午前中普通に仕事して、あと学校へ行って勉強できるんだろなという気持ちでしたんですけど、実際にやってみると全然時間に余裕なくて、テストとかあると勉強するのは帰宅しての夜しかありませんし、朝は早く仕事に行くので、全然時間がないなというのが高校時代との違いですかね。

—仕事というのは、「あんたこやあってね」と言われてやることもあるんだろけど、自分で仕事を見つけていくというのも大きい仕事になるわけですよ。

それが一番今思っていることの一つなんです。今までは言われたことを成し遂げるというのが私の中では一番大きかったですけど。仕事をしてみるとそれだけじゃなくて、ちよつとした気づきとか気遣いがすごく大切なんだなと思つて。でも私の中でそれがちよつとまだ欠けてると思うの

で、ちゃんと周りを見て今何しなくてはいけないのかを見つけれられるようにしなくてはいけないなとすごく思つてます。それが私の課題です。

先輩とか周りの人とか見ると、あつ、今それやればみんなにとつてよかつたのかなとか、今これをやつていたんだつたらこつちの気づきの方が大切だったんじゃないかなとか、すごく思うんですよ。これは自分からやらなくてはいけないかつたなとか、すごく思います。

失敗も結構いっぱいあります。患者さんはちゃんとした返答をしないと納得はしてくれないので。自分がちゃんと内容とか中身を理解しないと、患者さんにも説明しあげられないし、納得してもらえない。自分の中で整理をつけていかないと駄目だつて思いました。

—学校は二年で准看の試験があるわけ？
二年勉強して試験を受けます。准看を卒業して高看に行きたいとなれば受けていきます。でも行かない人はそのまま准看で働きますけど、確か勤続年数でしたか十年やると通信制の高看の学校に通つて二年やると資格受けられるというのがありましたね。

—目的に向かって進んでいるわけだけど、このままがんばつていこうという気になつてゐる？

がんばりたいとは思つてます。でもたまに落ち込みます。仕事とかで失敗したりすると。なんでやつたんだろなあつて思つて……。基礎の実習が最近終わつたばかり

なんですけど、その実習の時とかも自分やつていけるのかなと思いましたね。

仕事の面で言うと、やらなくてはいけない仕事は決まってるんですよ。何時に何しなくてはいけないと決まってるんですけど、時間との勝負なんです。患者さんは大勢いるし、私たちも自分でやらなくてはいけない仕事もあつてくると、やつぱりスピーディーにかつ正確に。

私たちはまだ全然医療のことはやらないんですけど、コップ洗いだとかオムツの交換、だつたりとか、てきぱきやらないと患者さん待つてくれないし、自分の速さで患者さんに苦痛を与えちゃつたりとかもある。そうなると、何でもちよつと速くやつてあげられなかつたんだろなつて思いますし、あとさつき言つたちよつとした気づきもまだ私の中でちゃんとできてないので、まわりのみんなががんばつていけるのを見ると私もがんばらなければいけないと思うんですけど、がんばろうと思つてやるとちよつと空回りしてしまつたりするので、そういう時は一番落ち込みます。

—そういうときは誰か話したりとか、愚痴を聞いてくれる人は？
よく母親にしたりとか、友だちとか。

「看護士の看は手をかざしてみる」と

—誰か吐き出す人いないとね。でも、そうやってみんなになつていくわけだけ。一方で、人を相手にするというのは生き甲斐もまた強く感じる人が多いでしょう。そうですね。私もちよつと仕事をしてい

る時に、たまたま患者さんと手をつなぐというか、歩行の時に手をつないで一緒に歩くという時があったんですけど、その時にあなたの手ずいぶん温かくていいね、温かい温かいとすごく言ってくれて、すごくうれしそうな表情をしてくれたんですよ。最初に学校で、「看護師の「看」は手をかざして見るんだよ」とか言われて、手で患者さんに優しくさとか思いやりとかも与えられて、手はすごく大事なんだよと習ったので、最初なかなか意味とか理解できなかったんですけど、その患者さんにその言葉をかけてもらった時に、すごく手つて大事なんだよなと思って、「ありがとね」とか言われると、この手でこんなに喜んでもらえるんだとうれしくなったりしました。

—震災後ということで精神科の場合、例えば災害でダメージを受けての症状できている人はいますか。

カルテも全然見られないから深いところまでは知らないんですけど、でも一人の患者さんが「看護学生なんだね」と声をかけてくれて、「そうです」という話をしていたら、その方の奥さんも同じ学校を卒業して看護師としてやっていた方みたいなんです。でも震災でその奥様を亡くされたみたいで、そのことを話してきてくれたんですよ。

「うちの女房も学生の時あったんだよ、今ねえ、山本さんも大変だと思うけどがんばってね。俺の奥さんも震災でなくなっちゃったんだけど、看護師でいろいろ勉強しててさ、教科書とかも分厚くて難しいと思

うけどがんばってね」と言われました。震災の影響を受けてというのはその方しかわからないんですけど、いらっしやいましたね。

—そういう人には、どういふふうに応えたのか。

震災については、私はこうでしたけどって言って。そうなんですっていう感じで、受け身的な感じ。あと、私の前ではそんな悲しい顔とか全然見せなくて、私の学生生活についての方をすごく気にかけてくれました。

—そこら辺もなかなか微妙なことですよ。何か真面目に受け止めて一緒に大変ですねなんて返せばいいだけじゃなくて、何気なく聞き流す振りをしているとか。そういうようなことが、すごく相手の患者の人にとって大事なことになることがあるんだろうね。

—そうですね。今、どう接すればいいのかわからないのが全然わからなくて、そういう相談事とかをしてこられる方もいるんですけど、大変だったんですけど、そうだったんですけど、大変だったんですけど、そうだったんですけど、すねというのもいいんだよと習ったんですけど、それだけでいいのかなと思ったりとか。でも、私が言った一言で違う方向に行っちゃったらどうしようとか。なんて声をかけてあげたらいいのかわからないので、今はただそうなんですとかしか言えないので、それもそれでいいのかなって思ったりもします。

—こういう時にはこのように応えるのですよね。そういうものね。

すよ。

—今通っている看護学校では、こういう時にはこうするんだっていふふうには教えられることがあるんじゃないですか。

—こういう時はこうだよというよりも、私の病院は精神科なので、鬱病の患者さんには励ますのはダメというのが言われて、励ますと余計ダメな方向に行っちゃうというのがあるみたいなんです。なので励ますのではなくて、とりあえず励ますのは厳禁ということになっているみたいで、言葉のかけ方とかそういうのはないんですけど、この病気が励ましたらダメだよとか、そういうのはありませんね。

—石巻市医師会附属看護学校は、大体そういういつでも、誰でも、どこでもこうやればいいんだとかいうようなハウツーを叩き込むのではなくて、

違いますね。

—違いますか。その学校も、ここならいいやと思っただけから選んだんですか。ここで生きていくからここに行くしかないということでは……。

—そうではないです。ずっと看護師になりたいなというのはあって、県外に行くことも考えました。先生とかにも、こういう学校もあるから最初に普通にこっちの高校に行った方がいいんじゃないかというのもあったんです。だけど、私もともと地元が好きで、震災もあって余計家から離れたくなくなりましたよ。もし自分が県外とかに行っている時にまたあのような大きい震災が来て、ああいう状況になったらす

ご心配だし、なら自分が地元に残って、ずっと家族のそばにいたいなというのもある。看護師になりたいというのもあったので。

—それで、この学校は納得できる教育内容の学校で、いろいろ手応えをもって学べてる？

学べます。うちの学校は他の医師会のよりも学ぶことが多く実習とかも多い学校といわれています。なので、厳しいところもあるんですけど、でもその実習を乗り越えると先輩方とかももっと上に行きたいという気持ち高まっている方も多くいて、ほとんど進学されるみたいなので。私はまだ実習とかそんなに行っていないので、大きい学びはまだないんですけど、これからたぶん出てくると思います。

—1年生の中で働きながら来ている方が多いの？

私の学年はほとんど働いていますね。働きながら学校に通ってますね。みんな大変だと言いつつ、がんばって両立しています。

けっこう学校で学んだこととか、仕事で学んだことが両方で活かされるというのがあるので、そういう面では働いていると実際にそういう現場を見るので勉強になるんだと思います。

今、石巻で

—石巻が好きで離れたくなくて、それで石巻の病院に勤めて石巻の学校に行くと。将来も石巻で働こうと考えているんだろうと思っただけ。そういう山本さんが今の石巻のいろいろを見て考える事ってどんなこと。

昔は、震災前とかは、けっこう漁とかも盛んというのが自分の中の印象で。魚おいしいねえと他県の方、友だちとかからも言われてたんですけど。震災後はそういう漁とか産業も少なくなってきた、今もニューズでけっこうやってるんですけど、牡蠣の養殖がなかなかうまくいかないとかいうのをよく見て。私のいとこが牡蠣の養殖をしていたんですけど、震災前はいろいろそういう海のをたくさんいた、だいて食べてたんですけど、今は全然、たまにあるんですけど。

石巻のよかった部分がちゃんと前みたいに戻って、ちゃんと復興につながってほしいというのが今の私の一番の思いです。そういうニュースをやっていると、だんだん悲しくなってくるので、もっと前みたいになればいいのになって。全然、戻す力とかないと思っちゃいますね。

私の通勤道でもあるんですけど、毎朝通るたびに未だに信じられないというんですかね。この光景を見ると全然進んでないなと思ってしまっ。やっぱりこういう土地とか環境とかが前みたいにならないと活気とかも生まれてこないと思うので。すぐにはまだ戻らないと思うので。市の方とかでも活気の出るお祭りとかをもっと増やせばいいんじゃないかなと思いますね。

—本当に更地になってね。通るとちょっと減入ってくるね。

はい、本当悲しくなりますよね。前の光景とか思い出せなくなりますよね。

—今の同じ学年の人たちと一緒にその後話し合っていることがありますか。

一番仲のいい友だちなんですけど、全部家とか流されてしまっ。今たまたま私のうちの近くに引越してきて、近いのでちよくちよく会ったりするんです。その人の家でもおばあちゃんがいって、ずっと海の近くで過ごしていたおばあちゃんなんですけど。そのおばあちゃんがアパート暮らしをするのがはじめてみたいで、なかなかなじめないということを言ってます。その子自身も港に行くと落ち着くん

だよめみたいな話にして、自らそういう話をするというの



—病院はいろんな人と会うわけだよ。実際、病院や学校に行ったりしているなかで山本さん自身、人の見方、人間についての考え方というのが少し違ってきたなんていうことある。

なんだろう、私は結構みんなと仲よくし

て楽しくできればいいかなという考えがあったんですけど、仕事してると、学校生活でもあったと思うんですけど、やっぱり自分の性格とかなかなかうまくいかないということも結構あるんですね。高校の時は、そういう子がいたら普通に気の合う子だけでやればいいやというのが多いと思うんですけど、仕事をしているとそうはいかないと思います。いくら自分と合わなくても仕事を

していく面でその人の役割がすごく必要だったりとか、その人の性格が自分にとってよく出るところも、何ていうか引き出されるというか、出てくると思ったので、やっぱり合う合わないではなくてやって行かなくてはいけないと思うんです。なので、ちゃんとそこを自分で理解して納得したうえでつき合っていかなければいけないなと思いましたね。

—それはやっぱり学校時代とは違って、今まで見えなかったものが見えてくるのかもしれないよね。これからの自分を考えて不安のような事とか浮かぶことある？

—しよっちゆう浮かびます。看護師というのは自分の中のずっと夢だったんですけど、そう簡単にいかないですよ、何事も。何の仕事をするにしても。さっきも言った悩みとか出てくると、これから上に行くにつれてもっとその悩みが増えたりとか、もっと大きくなったりとかするんだろかなと考えると、自分は本当に看護師に進めるのかなと心配になってくるんですけど。でもやっぱり看護師になりたいというのはあったので、あきらめたくはないので、がんばる

うと思つてやつてます。

—さっき、手を握った時にかけてもらった言葉すごくうれしかったって。似たようなこと、他にありますか。

—一つは、私が行く病棟に声出せない方が一人いらつしやって、私は最初その方がしゃべれない、声が出ないということを知りなかつたんですよ。のどに包帯じゃないんですけど、布みたいものを巻いてて、汚れとか食べ物とかを防御するためだと思つてたんですね。でも、ある日その方が塗り絵していて、ああ絵を塗ってたんですね。何塗ってたんですかと聞いてもただうなずいたりとかしなくて、何でしゃべらないんだらうなとずつと思つていたんですよ。それで、長くいる方に「もしかしてあの方で声出せないんですか」と聞いたら、「手術をしていてしゃべれないんだよ」と言われて、その時に何で私はそういう声が出せないのかもということを考えなかつたのかなと思つて。しゃべるだけじゃなくて、非言語的コミュニケーションと言つんですか、しゃべらなくても表情を見て感じ取るということが多いみたいなんです。そのことをちゃんとわかっていたら、もつと違う接し方というのができたんじゃないのかなと思つて。なので、それからはもうちょっと観察とかして話しかけるように心がけてますね。その方がまだいるんですけど、会つて「お茶ですよ」とか声をかけたりすると、前に比べて頷いてくれたりとか、「おいしいですね、お茶って」などと言うと「うん、うん」と頷いてくれたり。それ見ると

ちよつと元気なかなと思つて、うれしくなります。そういう時は、今の仕事いいなあと思います。あつたかくなります。

—非言語的コミュニケーションという言葉も、看護学校で習ったんですね。

—はい。そっちの方が多いんだよって。だから、観察は大事なんだよと言われて。

—そうすると、実践の経験と学習で習っていることがびつたり重なって、手応えが出てくる？

—はい。勉強になったなって。

—仕事を持つということはすごいことだね。去年の、つまり1年前にはその時のことそれからこれからの自分をただ推測してしゃべりあつたということだったけど。今日の山本さんのお話は自分が実際に生きている場での話ですよ。大変な違いだ。

—そうですね。自分でもビックリです。

—聞いている方もビックリだ。1年つてすごいな。今日は山本さんだけだけど、あの時いたメンバーがきつと同じようにそれぞれいろいろなところで、それぞれの1年があるんだらうなあ。そういう意味では、またそれぞれに聞ける機会があるといいなあと思いました。今度また、カルテも見られ現場にもうちよつと深く入れるようになった山本さんの話を聞いたら、今日と違った話が出てくるでしょうね。忙しいところ、今日は、どうもありがとう。

仮設住宅でのお話から考えたこと

筒井潤子

先日、宮城県を訪問した際、ある仮設住宅に伺い、そこにお住まいの御母さんからお話しをお聞きしました。2人の子どもさんを持つこのご家族は、様々な事情が重なり、仮設住宅への入居が遅れ、入居できたのは震災から半年以上たつてからだったとのことでした。その間は、避難所や簡易テントでの過酷な生活だったそうです。

お母さんがこんなお話しをしてくださいました。

当時小学校*年生だった娘さんは、不自由なテント生活の中でも明るく、手伝いもよくしてくれて元気に過ごしていたそうです。ようやく念願かなって、仮設住宅に入り、家族4人での生活が戻りほっとしたころ、娘さんが、お母さんに「この頃、目がよく見えない」と訴えてきたそうです。そこで、さっそく近くの眼科で診てもらったところ、確かに視力は急激に低下しており、視野も狭まっているという状態だったそうです。お医者さんは、二人にこう説明をしてくれたそうです。「この視力の低下と視野の狭まりは、この間の大きなストレスからくるものだと思います。この被災状況の中で、子どもは平気そうにしていますが、多くのストレスを感じています。その中でのがんばりの疲れが、こういう形で出ているので、ゆっくり日常生活を取り戻していく中で、症状も回復してくるでしょう。」お母さんはそれを聞いて、娘は平気そうにしていたけれど、ずいぶん無理や我慢をしていたんだなあと改めて感じるとともに、この症

状がそこからくるものだとわかったことで、不要な心配をしないで、ゆっくり子どもとかかわってほしいと思われたそうです。こうして書いてしまえば、どこにでもあるような一つのエピソードです。でも、この中には、とても大切なことが凝縮されるように詰まっています。

まず一つ目には、援助者であるお医者さんが、「異常な時の正常な反応」ということを十分認識しておられたということです。「異常な時の正常な反応」。これは危機対応を考えると、覚えておきたい言葉の一つです。人は、異常な（危機的な）状況の中では、平時には異常だと思われる反応・症状が出るのはおかしなことではなく、当然のことだという意味です。この認識があたりだったからこそ、きつとお医者さんから二人への症状の説明は、言外に娘さんへのねぎらいと敬意を含み、またお母さんへの心強い支えとなったのではないかと思います。参考までに、この症状は、一般には、「心因性の視力低下・心因性視野狭窄」といわれるものです。援助者の側が、一定の知識を持っておくことは必須です。ここで言う知識とは、いわゆるハウツー的な対処のマニュアルではなく、援助の基本としての知識です。それが援助者を落ち着かせ、その落ち着きが、相手の方の支えとなるのです。

二つ目に注目したいのは、娘さんが、過酷なテント生活の最中でなく、仮設住宅に入り、それなりにではあるにせよ生活が落ち着いてから、症状を出してきたということです。この症状は、仮設住宅に移ってから発症した可能性もありますし、震災直後から発症していたけれども、生活すること自体に必死な中で、それを症状（いつもと違うな……おかしいな……）として気づく余裕がなかったという可能性もあります。いずれにしても、このように「症状」や「問題」は、少し時期を遅らせて表面化してこることがしばしばあります。人間は、何かが起こって大変な最中は、緊張で張り詰めているため、むしろ普段よりもしっかりしていたり、堂々としていたり、よく体が動き疲れも感じず頑張れるということがあります。でも、生活が落ち着いてくると、その緊張が緩み、本来の感情や感覚が戻ってきます。すると、これまでの傷つきや疲れが「症状」や「問題」として表面に出てくるのです。

最後に大切なことは、娘さんがお母さんに訴えることができ、それは、それを受けとめられるという信頼ある関係性が、もともとつくられていた証だということです。危機の時にいかに対応するかは重要なことですが、その対応が功を奏するかどうかは、もともとそれまでにつくられてきた関係性と、その関係性の中で育まれてきたその子どもの自分や他者への信頼感によって決まってきます。とくに子どもは、周りの大人の状況を敏感に察知し、周りの大人に受けとめてもらえると感じた時に、安心して「症状」を出したり、自分が抱えているものが「症状」だと自覚して助けを求めることができるのです。「症状」が出せるといことは、そういう意味で、けっしてマイナスなことではありません。安全で安心な関係性の中で、人は、「我慢し持ちこたえる力」と「助けを求めることのできる力」が育まれてい

くのです。そして危機に直面した時、その力を状況に応じてバランス良く使っていくのです。これを逆に考えると、「症状」が出さないという「症状」があるということもできます。つまり、それまでの関係性の中で、他者や自分に安心感や信頼感を持っていないと、自分のしんどさに気づいたり、他者に助けを求めて自分を守っていくということができません。助けを求められるということは、「自分には助けてもらう価値がある」という感覚を持っていくからなのです。それがない子どもは、しんどさを抱えながら、自他ともにそれに気づかず、平気そうにしています。でもそれは、子どもの生きづらさとして子どもの中に蓄積されていくことになります。日常の何気ないかわりの中で育まれる力が、危機の時にも子どもを支えるのです。

今回の震災のように大きく複雑な出来事に際しては、5年10年という長い単位で、「症状」「問題」の表出を考えていかななくてはいけないともいわれています。

今日を生きるということに必死の状態から、明日、そして将来を考えるゆとりが出てきたときに、さまざまな症状が出てくるのがよくあります。また、「異常な状態」のときの体験の差や感受性の差などから、家族の中で考え方や思いにすれ違いが生じ、いさかや離婚に至るなどということもあります。

でもご心配なく。「この子は、いつ症状を出すんだろう」、「元気なのは、症状を出せないでいるだけなのかしら」と、びくびくしながらみている必要はありません。もし何かしんどさを感じたら、いつでも受けとめるよという大人の側の落ち着きだけで、子どもが支えられることもしばしばですから……。

(都留文科大学)

山下美咲さんに聞く

あの手紙で私の書きたかったこと



3・11後の9月にセンターは臨床教育学会と「3・11あの日のこと、あの日からのこと」を出版しましたが、そのなかに、担任の先生に書いた山下美咲さんの手紙が入っています。2年後の1月、美咲さんに会って、手紙を書いた時のことを話してもらったものです。聞き手は春日と清岡で、同席していた方の感想発言から臨床教育学会の田中孝彦さんと上田孝俊さんの一部を使わせていただきました。（かすが）

—この美咲さんの手紙は、鎌田先生に話を聞いた時コピーさせてもらったものです。書いた日付けはないです。でも、本では4月15日、門脇小学校6年2組とも書いてある。書いたのはいつなの？

これは、卒業式の前のあたりで、4月の初旬ぐらい。

—そうすると、4月15日というのは、鎌田先生があなたにもらった日かな。

たぶんそうだと思います。

—誰かに「書いて」と言われたわけでもないだろうに、どうして書いたの？

やっぱり2年間同じ先生だったんで、思い入れというか、すごくクラスに本気で向かってくれた先生だったので、震災ということになって自分の気持ちを手紙にして伝えようと思って書きました。

—そう思ったのはいつ？

手紙を書くころと思ったのは、卒業式を行

うという連絡が来た時に、ああ、卒業式の日に渡せるように手紙を書きたいなと思って、その時に決めました。

—2年間お世話になった鎌田先生のどんなところが好きだったの？

今まで6年間暮らしてきた中で、クラスでの行事でも本気になって盛り上げようとしてくれたり、勉強もわからなければわかりやすく教えてくれたり、私は学校最初はあんまり好きではなかったんですけど、学校を楽しくしてくれた先生だったので、そういうところがすごく大好きです。

よくクラスでお楽しみ会とか、なにか行事があるごとに先生は本当に全力でやってくれるんです、顔にすごいメークしたりして。ケーキを作ろうと思うたらケーキの材料も買ってきてくれたり。本当に全力で生徒にぶつかってきてくれるので、すごくい

い先生だったなという印象が残っています。

—私は、あなたが手紙を書いた時のことをいろいろ想像してみたんです。手紙の紙はとか、勉強机で書いたのか腹ばいになって書いたのかとか。

勉強机です。おばあさんが私の家に避難してきていました。自分の使っていた便せんも学校で燃えてしまっていて、おばあさんの持っている便せんが一番使いやすかったんで、それを使いました。

—鎌田先生のことを「私は先生みたいな大人になればいいなと思いました」「先生もすごくてきばき動いて門小生を落着かせているのを見て、おおかっこいいなあと思いました」って書いているよね。美咲さんが先生に一番伝えたかったのは？

一番伝えたかったのは、やっぱり鎌田先生が緊急の非常事態になって自分のできる限りのことを一生懸命しているところを見てかっこいいと思ったのと、自分を尊敬させてくれたことに感謝したかったということとを伝えたかった。

—手紙の最後に、「みんなで力を合わせて」「がんばろう6の？、がんばろう……」と付けたよね。これは自分にも言ってるの？

これは、自分のゆかりある場所と先生のゆかりある場所を、自分にも言い聞かせてるし、先生にも頑張ってほしいなと思ったので書きました。

—先生にもこれからも頑張ってもらいたい、そういうことなの。あなたの手紙を見ると消したり書いたり跡がない。どのくらいの時間がかかったの？

30分ぐらいで、すぐに書き終わりました。自分の思ったことだけをその



ま書きました。

—書いていたら、このようになっていったということですか。

はい。

—書き上げた時はどんな気持ちでした？

やりきったという達成感がありました。早く先生に渡したいと。

—卒業式の時に渡した。

はい、そうです。私が卒業式終わったらゆつくり読んで下さいと言ったので、たぶんその後を読んだと思います。

—美咲さんは、震災についてその後どんなことを考えましたか？

中学校になっても岐阜県とか遠いところから支援されているのを見て、震災があったことについてみんな支援してくれたり応援してくれているんだなと思って、すごく全国の人に感謝しています。

(上田) 日和山へ登るときに美咲さんたち歌を歌いながら登って行ったんだよね、なんていう歌だったかな。

ベスト・フレンド

(上田) ベスト・フレンドか、本当に一番命に関わるようなね、人生できっとあとから考えたら怖い出来事だったと思うんだけど、子どもたちにとっても危機なんだけど、そういう素直な先生になりたいというふうな美咲さんが思うような時間でもあったというふうな感じで、なんかあったかいひとときを書いた手紙と僕は受け止めたんです。それは間違ってますか。

今思い返すと、やっぱり避難している時に、最初に私が友だちと2人で登って、その後ろにたちちようど3人の子たちがその卒業式で歌うベスト・フレンドを歌い始

めて、その歌詞というのがこの時と似ていて、どんどんどんどん広まって、6の2で歌って、なんか鎌田先生がそれを聴きながらゆつくり登っているのを見ると、今の時間はとてもいい時間なんじゃないかって。今思うと、その当時はもうパニック、父は下の方で働いているし、もういろんなことが頭の中をぐるぐるで、そんな考えられるような余裕はなくて、でも今考えてみるとそういう時間だったんだなと。

(田中) あなたが卒業するにあたってすごく大事にしてもらった先生に書きたいと思ったのはその通りだろうと改めて思ったんだけど、結局美咲さんは美咲さんのために書いたんじゃないかなと何回も読みながら思った。僕はそのお手紙を覚えてますけど、私は津波が町を襲うのを見てしまったために三日間眠れない日を過ごしました」と書いてあったでしょ。僕は先ずそれを読んで、あなたがすごい震災と大津波を目の当たりにして、本当に深い衝撃を受けたんだなというところを一つは思った。だから、別に僕が何ができるわけではないけど、あなたの衝撃と一緒にこれから受け止めながら、周りの人たちが生きていってほしいな、あなたを守る大人たちがちゃんと周りにいてほしいなというふうな思ったのが一つ。それから、もう一つは、おばあさん、「鎌田先生がふるえているおばあさんに自分のジャンパーを掛けてあげて、それから教頭先生が叫んだ」というのがありましたね。「もっと上にながれって。それは正しい判断でした。なぜなら下級生が津波を見ないですんだからです」と書いてあったでしょ。特に、だからとても大変な事態であなた自身も不安だったと思うし、守りたいというふうな思ったと思うけど、しかし（私より先にもっと守らなければならない幼い子どもがいる）とか（おばあさんがいる）とか、そういうことを考えている。振り返って考え

たというふうな書いていることがすごく印象的だった。「先生みたいな大人になりたいと思いました」というのと合わせて考えたら、あなたはどうも自分ではつきり思っていたかはわからないけど、自分の過去と現在と未来をつないでいく、その一つのも一つらしい出来事だったけど、震災と大津波にあったというところを、その一つの出来事としてあなた自身が位置づけなおして生きていこうということを感じがしたんですよ。いま日本の子どもたちがダメになつてるとか言われているけど、そうじゃない。こんな厳しい出来事に会ったのに、ちゃんと考えようとしている子どももいる、と思ったんです。だから僕の感想は、もちろん鎌田先生に気持ちを伝えられたこともあるけど、何かあなた自身のために書いたんじゃないかなって。それがとても深い大事なことを書いているなと思えてうれしかったし、こういう子が日本にいてくれてよかったというふうな励ましてもらえた。どうもありがとう。

—このように、美咲さんの手紙、みんなよく読んで考えたんです。美咲さん、将来のことを何か考えていますか。

困つてた子どもたちとか、そういうニュースとかを見て、保育士とか困っている人を助ける仕事を何かできたらいいなと思っています。

—美咲さんが学校と関係のない時間の中で、あの手紙をなぜ書いたのか、とてもよくわかりました。時間をつくっていただき、ありがとうございました。



PART II 「成績ってなんだろう」

須藤 道子

小春日和に恵まれた2月2日、11月のPART I「今どきの『友だち事情』」に続くPART II「成績ってなんだろう」を開催した。

センターに集う私たちにとって「学力」や「学ぶことの意味」は永遠のテーマだが、「学力」にはいつも当然のように「評価＝成績」がつきまとい、成績には、評価する側と評価される側という、生徒・学生対教師の関係性を規定する要素がある。本音と建前が交錯しそうな、なかなか微妙なテーマでもある。だが、話題提供の方をはじめご参加の皆さんは、それぞれのありのままを率直に語って下さった。

① 話題提供の皆さんから

お二人の大学生の方には進行役からの質問に答えて頂く形でお話いただいた。

渡辺早紀さん（大学二年生）

成績を意識するようになったのは高校一年三学期の最後の頃。転勤族だったので両親はどこに行っても困らないようにと家庭学習にも熱心だった

し、成績もとても気にしていた。クラスの中で成績が良ければ一目はおかれるが、人気があるのは明るい子やスポーツの得意な子。高校生までは努力が報われる感じがあって成績をつけられることに抵抗は無かったが、大学では教授の考え方に合わないと感じるなど疑問。

「評価」はあった方が良くと思うが数字で表すのではなく、文章や細目の所見などで、自分のことが課題ということが分かるようであればやる気につながり、励ましになる。

千々和旺紀さん（大学二年生）

成績は小さいときから意識していて、いつも100点を取りたいと思っていた。通知表は気にしていなかったし、模試の結果が良くても、中学・高校の成績はあまり良くなかった。勉強は受験のためと思って来たが高校生活は楽しかったし、大学の推薦とかも視野になく実力勝負だと思っていた。親も100点取れば「すごいね」と言ってくれたが、通知表では3だったりしても何も言わなかった。好きな科目と得意な科目はあまり関係は



ない。学校のテストは今ならついているところが出るのだから出来て当たり前だし、成績はつけなくても良いのでは。教育学部で学ぶ今もこれまでの「学習観」に特に変化はない。

土屋聡さん（小学校教師）

通信簿をつけるのは好きではない。私は説明責任をもとめられたら、つけ方に困るかもしれない。「ほめる」というのは良さそうだが、良くもないのにほめても子どもに何も伝わらないし、頑張ってもいないのに「頑張ったね」と言ってしまうのは

マズイ。

いま2年生で九九に取り組んでいて、なかなかうまくいかない子にみんなも泣きそうになって応援しているが、そういうのは数値化できない。図工の観賞力なんてどう数値化すればいいのだろう。2年生でもカンニングする子がいる。見下されたくないのだろう。

俺ですごくいと自分を認め、自分は大切にされていると感じさせるのが自分の仕事と思う。

大場啓壽さん(造園会社経営)

我が子は五人。進む道は自由にと育てたが、結果的に次男が後継者に。

中卒の弟子たちと寝食を共にしながら育ててきた。今日は何を覚えたかとか、日誌のようなものを書かせて誤字・脱字から指導するが、学校でちゃんと勉強すればよかったと気がつくようだ。その気にさせるのが教育だと思う。彼らは育った環境も、親の考えも、もって生まれたものも違っていて当たり前というところからスタートしないと間違える。能力のある子は頑張らなくてもそこそこの成績をあげるが、伸びしろはあまりない。頑張りが評価されないの、前向きにやる気が起きないの、だろう。

(2) 話し合いから

全体をお伝えすることは適わないので、以下二つの論点からご発言を拾った。

テスト・成績・評価の意味を問う

・ 教育大の学生に、テストは子どものつまず

きを知るためにあると言うと驚く。

・ 評価の意味は小学校とそれ以降では違う。小学校ではやればできるといふ感覚を身に着けさせたい。

・ 成績で励まされることもあるが、あつたかもしれない可能性を断たれることもある。中学時代に成績表を見て看護師になりたいという夢を諦めた友人もいる。

・ 成績はひとつの側面。先生たちにはそれだけでないんだと生徒たちに伝えて欲しい。

・ 自分の持つていない視点から評価して欲しい。

・ 物理などテストがなかったら勉強しない科目もあった。それはどうだろうか。

・ 学力は集団的なものと思う。クラスにいるんな子がいて、教え合い、学び合う中でみんな伸びる。

・ 年齢で区切ってあるレベルの教育をするといつても成長発達は一人ひとり違う。結果は長い目で見ていきたい。

受験勉強を考える

・ 点数を追う受験勉強は人格形成と無縁だと考えるのか。

・ 死ぬ気で受験勉強した。数値化されること全般が悪いと言えるのか。医者などの職業につく人はよくわからない基準でなつて欲しい。

・ 生きていくなかでしっかりと頭をつかつて考える機会は大切。

・ なぜこんなに勉強するのかと思つた反面人を育てるのは有能感と承認要求だと思う。

・ 受験勉強は特に苦しくなかつた。日本史など、勉強した内容で友だちと会話するのが楽しかった。

・ 一浪したが将来のことをじっくり考える機会になつた。ガリガリ勉強して現役でストレートに行くより良かった。(同体験多数)

(3) 今回をふりかえつて

これ一つのテーマからなんと多くを考えさせられたことだろう。

話題提供のお二人をはじめ参加して下さつた学生の皆さんは、学習へのモチベーションも高く、有能感もあつて、この年代を代表するということには当たらないのかもしれない。それでも、彼らにとつて勉強したり評価されたりすることは、いわゆる他者との「競争」という面よりは、自分にとつてどうかだつたことが、どの発言からもうかがわれて彼らがその年齢なりの自分をまっすぐに生きていることが伝わつてきた。

大場さんのご発言に何度も「伸びしろ」という言葉があつた。大人の目線のあり方を示して頂いたと思う。そして、誰にとつても評価や成績が「それだけではない」と相対化されていたら、子どもたちも自分自身の可能性を信じて、主体的な人生への態度を育んでいけそうな気がする。

(研究センター事務局)

分化をしたらどうなるかを考えようというのだ。

生徒はどう考えるか興味があったが、残念だが討論にはならなかった。無限に分割し計算を続けた場合を予想するためには、思考の飛躍が必要なのだ。白鳥が飛び立とうと両足で湖面をたたくように疾走し、一瞬ふわっと空に浮かび上がる瞬間がある。そんなひらめきのような思考は、センスというか、感覚というか、教えられるものではなく生徒自らの思考の経験から生まれるもの、そのような力を育てるためにも物事の本質を学ぶ学習が必要なのもかもしれない。ここは、仲本さんが説明し、無限に細分化すると誤差はなくなり、 $y = x$ の1秒間に転がる距離は0.5 m (分数では $1/2$ m) で、 $y = x$ のグラフの下の面積部分になるとまとめた。

次は、「新車がスタートして x 秒後の速度 y m / 秒が、 $y = x^2$ の関数であるときの、1秒間の距離を求める」という問題を考える。生徒は、1秒間を10等分、100等分し手際よく計算し距離を求めた。さらに1000等分、10000等分で近似値を類推し、最後に無限に細分化した場合を予想した。そして、 $y = x^2$ の関数の時は、スタートから1秒間の距離は $0.333\cdots$ m ($1/3$ m) になり、 $y = x^2$ のグラフの下の面積部分と一致するという結論を導き出した。ここで前回の学習が生きて働いていたと思う。

仲本さんはこれで終わりにしなかった。もし $y = x^2$ のグラフの下の斜線の部分が、全体の長方形の面積の $1/3$ なら、工作用紙のグラフを切り抜き、全体の長方形1枚と斜線部3枚を天秤で下げたらどうなるか、重さはつりあうはずという仮説をたて実験に導いた。天秤につりさげてみる。見事につりあった。生徒から歓声があがり、ホッとした笑顔が広がった。数学を学ぶということはどこか山登りに似ている。かけ算と関数の意味がわかり、長い思考の道のりをたどって積分法を知るといって頂上に到達した満足感がそこにはあった。

参観者からは「今回の授業は一方向的な説明や講義が多く、内容を深められたかったのでは」という感想があった。活発な授業のやりとりを期待していて、

途中で帰った人もあったようだ。生徒の動きも静かで退屈していたように見えたかもしれない。でも、授業は、最初から終わりまで生徒を積分の世界へ誘うための明快な論理につらぬかれていた。そしてその論理が生徒をひきつけていると私は感じた。

授業後の生徒の感想を読むと、「わかりやすかった。」「面白かった」と書いている。中には「積分をつかって面積を求められたときは、体がふるえました。感動で。大げさじゃなくて、本当に感動しました。」とあった。もちろん、みんなではない。「つまらなかった。話が淡々として眠くなった」という感想もあった。眠くなったあなたには、授業で一枚一枚配布された11枚の学習プリントを、その気になってもう一度、読み返してみることを勧めたい。プリントは、実に丁寧に考えぬかれて作られていて、一人で読んでもわかるし、きつかけ算から積分の世界への理解の扉を開いてくれるように思うのだ。

最後の実験で使った天秤は授業者の仲本さんの自作のもの、市販のビニルカバーつきの針金をひきのばし、メモリをとって糸とクリップで作ったものだが、つりあうように支点の糸の位置、クリップの下げる場所などに細心の注意が払われていた。計算をこつこつ積み重ね、推論を重ねて結論を出した生徒がこの実験でその結論を確信するうれしそうな顔が思い浮かべながら、この天秤が作られていたのかもしれない。

公開授業は一日だったけれど、このような授業を、もし1年間受け続けたら、どんな子に育てていくのだろう。そう思ったとき、「新・学力への挑戦」のなかに登場する、数学が大嫌いだったのが、大好きに変わっていった石田麻理、田代郁子、中里百合子、……という高校生たちの姿が次々に浮かんでくるのだった。

(研究センター事務局)



新しい世界の発見 新しい自分の発見

千葉 建夫

今回の公開授業は数学。授業者は「新・学力への挑戦」(かもがわ出版)の著者の仲本正夫さんである。29名の高校生と50名ほどの参観者が会場に集まった。

第一部は「わかるとはどういうことか」をテーマに、かけ算と関数の意味について考える。

かけ算は、「 $2 \times 3 = 2 + 2 + 2$ 」のように、たし算のくりかえしと考えると、「 4×0 」や「 $6 \times 1/3$ 」の説明はつかず、応用性がなくなる。かけ算は「1当たり量のいくつ分から、全体量を求める」ものとしてとらえると、0や分数のかけ算も、正負の数もすべて説明ができてしまう。

関数とは、「働き」のこと。「働き」は目に見えないからブラックボックスという道具で考える。自動販売機(ブラックボックス)は、入り口から150円入れると、「お茶」が一本出口から出てくる。この自動販売機(ブラックボックス)は、150円を「お茶」一本に変える「働き」をしている。入り口からある数を入れ、出口からある数の出てくる場合、そのブラックボックスの「働き」を関数という。かけ算も関数も日常の事物を例にしたり、量をもとにしたりして、その意味をしっかりとつかませようとしていた。わかるということは、その意味、本質がわかること、そして次の学習に使える力にしてほしい。そんな授業者の願いが伝わってきた。

休憩をはさんで第2部にはいる。テーマは「デカルトの方法を使って積分法に挑戦」である。

速度と経過した時間がわかるときの走った距離を求める問題を考える。同じ速さで動くときは、かけ算で動いた距離を出せるが、時間がたつにつれ、速度が刻々と変化する場合、お手上げになる。そのときに、細かくわけて寄せ集めるというデカルトの総合の方法でこの問題を考えようというのだ。

斜面をころがるパチンコ玉は、どんどんスピードを増していく。「 x 秒後のパチンコ玉の速度 y m/秒が、 $y = x$ の関数で与えられるとしたら、1秒間に転がった距離は何mか」という問題を考えた。速度が一定のときに、時間を x 軸に、速度を y 軸にしてグラフにすると、走った距離は x 軸と y 軸にかこまれた長方形の面積部分に現れる。速度が変化しても、 $y = x$ のグラフ上で時間を細かく分けると、速度を一定とみなせて、細分化した小長方形の面積で距離がだせる。

それで、最初の1秒間を10等分し、0.1秒ごとに走る距離を求め、10回分の面積を合計し近似値をだす。誤差をなくすため、さらに100等分にわけて距離をだし、100回分を合計する。最初の10等分はこつこつ計算をし、100等分は一回ですむ文字式で計算するが、1000等分、10000等分となるともう限界だ。そこで、これまでの計算の結果から無限に細



石田先生。今年も、2月12日～15日まで、先生にお世話いただいた尚綱学院大学の非常勤集中講義に行ってきました。先生の大学が、小学校教員免許の「課程認定」を受けるので、「生活および生活科教育法」の授業担当をしていただけませんかと依頼されたのは、確か、みやぎ教育文化研究センターが民主教育研究所と共催で「第17回全国教育研究交流集会」を行った年でしたね。

その頃、私は、宮城教育大を退職したら仙台を離れるつもりでしたし、また、授業担当者でいら幾人か適任者がいらしたのに、私に、21年間居た宮城と繋がりが持てるようにと配慮してくれたのですね。本当に、有難いことでした。

先生とは、同じ北海道の生まれというところで、どこかで気が合いましたね。それでも最初の出会いには思いませんが、何と言っても、ポーランドです。



ね。「アウシュヴィッツとコルチャックを訪ねる旅」というみやぎ教育文化研究センターの企画で、先生は、折角、奥様とご一緒だったのに、私たち3人の酒飲み仲間と「ズブロッカ」の日々でした。先生

石田一彦先生を悼む

は、『教育の散歩道』（本の森、2004）に、こう書かれています。「ナチスの戦争犯罪という、やはり忘れられないのはアウシュヴィッツです。……私の目をくぎづけにしたのは、子どもたちのとても小さなかわい無数の靴でした。この靴をはいていた子は、だれに手を引かれてここまで来たのだろう。そんなことを考えているうちに、言いたいような怒りと悲しみがこみあげてきて、しだいにその靴の数々の輪郭がかすんで、見えなくなってしまうました。」

そうなのです。この感情溢れる表現に籠められた優しさが石田先生なのです。この一文に接して、わざわざ結団式の日、「ヤヌシユ・コルチャックの思想と子どもの権利条約」の話をさせていたとき、ポーランド語辞書を携帯して臨みながら、帰国後の『報告集』に「ポチャン（コウノトリ）発見記」を書いて喜々として悦んでいた私は、只々、恥じ入るばかりでした。そして、「3・11」の年の12月です。先生は、東京で開催された「第20回全国教育研究交流集会」の私が世話人をした第4分科会で、レポート「震災であらためて見直された学校の存在・教師の役

割」を、二つ返事で引き受けてくれましたね。先生のレポートは、『3・11あの日のこと、あの日からのこと』（かもがわ出版、2011・9）に書かれた文章をベースにして、「日常のつみ重ね、学校・地域の生活の中で培われてきた関係性が、危機的な場面で花開いた」ことに目を向けよう、とうつたえていましたね。

田中 武雄

その報告が、『人間と教育』No.73（旬報社、2012・3）に掲載されています。先生は、先のレポートの最後を、「真の復興につながる学校教育の『再生』とはなにか、子どもを教育の要にすえるとは何を意味するのか、今こそ議論を深めていくことが求められている。」と結んでいますね。本当にそうですね。

2月15日、集中講義が終わった日、事務局に來年度の兼業規定の手続きをしたあと、少し辛かったのですが、3階の先生の研究室まで行ったんですよ。そうしたら、ドアの前に、「子育て・教育9条の会」のポスターが貼ってありましたね。先生は、2010年12月、仙台で開催されたこの会のことをよく話されていましたね。それは、先生が私たちに遺された「メッセージ」なのです。

2013・3・15（共栄大学）

「村を育てる学力」と出会って

佐藤 正夫

研究センター主催第2期「戦後教育実践書を読む」の第4回の案内人を引き受けてしまいました。

この「村を育てる学力」（東井義雄著）が出版されたのは1956年です。それは私が生まれた年代に当てはまります。いったいどんなことが学校で行われていたのか、想像することは出来ません。自分の小学校時代を思い出しても、実践という名に値するようなことが行われていたとは思えないからです。もう一つ気になるのは、タイトルです。「村を育てる」とは、何となく子ども一人一人の視点から遠いような感じを受けました。そんなことを思いながら読み始めました。ところが……。

「生きているということのすばらしさの中で」という章に、子どもとの暮らしや出来事が実に具体的に、正直に書かれています。ものを言わない子どもAちゃん

を何とかして言えるようにしようと東井さんは奮闘します。以前成功したこともあって、つとめてAちゃんと遊び、つとめて話しかけてみます。しかし、長く続かず、ハンコ作戦に出ますが、ききめはなく、がんばりを表にしようと呼びかけます。これでもききめがなく、ついにある日、「あのな、山本有三さんという人が書かれた『路傍の石』というお話を読むと、『石だつて叫ぶ』と書いてあるぞ、あんたは、石ころよりもあかんのだぞ！」と、どなつてしまいます。もちろん後悔し、どうにでもなれと断念してしまいます。

ところが、二学期になると東井さんの目が変わっていきます。Aちゃんをよく見ていると、箒や雑巾の使い方が組の中で一番うまいことを発見します。いつもバケツの水を捨てに行っているのもAちゃんです。Aちゃんは、バケツの水を捨てただけで帰ってくるではありません。水を捨て、新しい水を汲み、バケツを洗い、

水を捨て、そして帰ってくるということも東井さんはわかるようになりました。そして考えます。「Aちゃんはものは言わない。しかし、することの中で、Aちゃんはいつともものを言っている。Aちゃんの動作は、一つ一つ、美しいことばではないか。」と。Aちゃんは、やがて自分から口を開くようになっていきます。

わたしは、ずることの中で、ものを言っていると感じ取った東井さんの感覚が、とてもあたたかいと思うと同時にどこから生まれてくるのだろうか知りたくもなりました。

おそらく、ものを言わないのは駄目なことなのだという考えを捨てたところから見え方が違って来たのではないかと思えます。「今ある姿を受け止めることから始めなさい」と言っているように感じました。

今日もあわただしく過ごしてしまつた自分の教室。一人の子どもさえじつくり



見つめることのない日々。このようなあたたかい目を自分も持ちたいと強く思います。

「村の子らに力を」という章に、モリタミツという子が登場します。4年生であっても文字は一字も知らず、自分の名前も書けない子でした。東井さんは、まず自分の名前を書けるようにしてやろうと、「毛」から順序よく始め「リ」「夕」と進むことにしました。しかし、三日たつても、四日たつても、一月たつても「毛」が入らないのです。三ヶ月たつても効き目は現れませんでした。

ところが、ある日、学級の子どもらに「馬」の話をしてやったところ、「せんせい、あそこに書いてある字、バカバカお馬さんの、「ウマ」という字ですな」と、板書した「馬」という漢字を指さして叫んだのです。東井さんは、「子どもの命を預かり、それを太らせるしごとを背負っている私たちは、子どもの育つ道すじを知っていないてはならない。子どもの育っている水路を誤ると、二進も三進もいなくなってしまう。」としながら、自分の経験を述べたのです。

つい最近のことですが、円周率の勉強をした次の日、何人かが3・14の続きを調べてきました。すかさず黒板の端から書き始めると、大部分の子ども達が面白

がって、声をそろえて読みました。どこまでも続く円周率に教室は騒然となりました。その時、ある女の子が、「分らない！この何がすごいのか。みんな何でそんなに興奮してるのか。」と、怒ったように言いました。「えっ？ だってこんなに割り算した人がいるんだよ！」「限りなく円に近づいてるってことでしょ？」何人かがそんなことを話したのですが、「分かんない！」で終わってしまいました。

私の場合は、明らかに前の日までの授業がどうだったのかが問われます。40人の子ども達がいろいろな違いを持つたまま、それでもみんな考えて合う方向の授業だったのか。東井さんの語っている道筋とは少し違っているかも知れませんが、子どもの発達をないがしろにして教科書の配列通り進めた結果、だったのだと思えてなりません。

「子どもを太らせるための道筋を求め続けられない限り子どもを育てることはできない、持たない者は教師ではない」と言われているのだと思いました。「子どもが学び始めるきっかけは、子どもの何気ない言葉や暮らしの中に隠れている、悪い所ばかり目に入れないで、太らせるための技術と専門性を磨きなさい」と教えられました。何十年前も前の、名前さえ知らなかった教師が、子どもの本当の幸せを実現するために、目の前の子どもだけでなく、子

どもを取り巻く村の大人達をも変えていく仕事を続けたのです。「わたしたちは問題のまん中にいる」という認識で仕事をしたことのない私には、二重の驚きでした。この本との出会いは、東井さんのひたむきさ、優しさ、正直さに触れたことであり、自分の中に澱んでいた子どもに対する傲慢さや手立てのなさ、怠慢などが浮き彫りにされることでもありました。「今からでも遅くない、出来ることから始めなければ！」と、思わずにはいられない一冊となりました。

(仙台・川前小)

補足

14ページ

「あの手紙で私の書きたかったこと」について

リードで紹介してある「3・11 あの日のこと、あの日からのこと」(かもがわ出版)は左の本です。このなかの30ページから「子どもたちのことば」が入り、その一編が山下美咲さんの書いた「力を合わせて母校をふっかつさせよう」です。この文は担任の鎌田先生へあてた手紙ですので、「山下美咲さんに聞く」のタイトルが、「あの手紙で私の書きたかったこと」になっていきます。

なお、同文は、通信63号11年6月15日発行に、震災直後ということの配慮で、「下山みすず」の仮名で載せてあります。

* 前記の書籍「3・11 あの日のこと、あの日からのこと」の問い合わせは、研究センターにどうぞ。



小学4年の2学期、私は仙台市中心部から校外の新興住宅地に引越し、転校した。転校前、私は学校が好きではなく、欠席や「勝手に」早退することが多かった。明確な原因はわからないが、〇〇でなければならぬ、という窮屈さが苦痛だったことも一因ではないかと推測している。

5・6年は途中組替えがあつたにも関わらず、私は同じ先生に受け持たれた。赴任したばかりのK先生である。先生は着任式で、高い所からハンカチを落とし「ここから一緒に考えていきたいと思えます。」とだけ言い、さっそうと指揮台を降りた。変わった先生だなあ、と思ったことを覚えてい

る。

K先生は本当に変わった先生だった。

体育は、夏のプール以外、ずーっとサッカーだった。

音楽も教科書を使ったことはなく、先生のギターに合わせて、先生が教えてくれる歌を歌った。英語の歌も歌った。クラスの歌も作った。クラスの子どもたちを一人ずつ歌にするのだが、今なら問題になるような歌詞も少なからずあった。でもその時の私たちは先生

から笑いのネタにされるのがうれしかった。自分の欠点と思っていたことも、先生が笑いに变えてくれると、悩みではなくなってしまう。クラスはいつも笑いにあふれていた。

時々「緊張！」と言われ、黙想する時間もあった。その後「脚下照顧！」「質実剛健！」「友と和し協力すべし！」など、先生の後に大声で唱えたりもした。意味がわからない言葉もあつたが、何となくその時間もよかつた。

わたしの出会った先生 2

K先生のこと

日下 幸子



えなかつたが、それでも自由に勉強するのが楽しかつた。これで学習習慣や勉強する方法が身についた人も多かつたと思う。

気づくと、毎日楽しく学校に通うようになっていた。嫌なこともあつたが、それに負けないエネルギーが蓄えられたのかもしれない。エネルギー源は「笑顔」と「自由」、だろうか。

それから約10年後、講師時代にK先生と同じ学校に勤務することができた。たつた1ヶ月だったことに加え、嬉しくて意識し過ぎていたためか、あまり話もできず仕舞いだつた。

その後、小学校の同窓会に一度だけK先生が来てくれたことがあつた。年月は過ぎたが、私たちの前に立つた先生はさっそうとして、「自分にとつても、あの頃は最も思い出深い」と語る声は昔のままだった。

同窓会は毎年開いているが、今でもK先生の話で盛り上がる。私同様、先生のお陰で学校が好きになった人は多い。次にお会いする時は、舞い上がり、落ち着いてお話をしたい。そしてお礼を言いたい。

悪いことをしてしまつた時は厳しかつた。でも叱つた後は笑顔を見せてくれて、長々説教をすることはなかつた。

宿題ではなく、「家庭学習ノート」を作り、自主勉強をするように指導された。強制ではないが、先生が筆記体でカッコよく書いてくれる「Good」「Very good」が欲しくて、みんな家でも勉強していた。ほんの少しでもよかつた。私はあまり「Very good」をもら

ある教師の戦後史 — 戦後派教師の実践に学ぶ

野々垣 務 編

本書は、民主教育研究所の機関誌「人間と教育」(季刊) 50号(2006年6月)から75号まで、シリーズ「ある教師の戦後史」として連載した21人の教師からの聞き取りをまとめたものである。

編者の野々垣さんは本書の「あとがきにかえて」のなかで、ここに登場する実践家たちが歴史的にも、地域的にも直接、間接に影響を受けており、つながっていることを知るおもしろさがあった。戦後教育実践史の奥行き、深さ、豊かさを感じてきた。今日の日本の教師がやれずもすると現実のきびしさに自信を喪いかけているとしたら、私たちの先輩教師たちが切り拓いてきたこの豊かな実践の歴史の先端に自信を誇りにして自信を回復してほしい。

この本の証言のなかに、「僕が2年生(深川西高校)の時、日米安保条約が発効され、緊急の生徒総会で、三島校長は涙ながらにこれからの日本は大変なことになると訴えた。僕自身の生き方を決定的に変えたのはその時の三島校長だったと今でも思っています」と語っている。すばらしい校長がいたものだ。なんとその校長が、深川西の後宮城(その理由は不明)に来て白石・仙台にと勤めた三島孚滋雄校長である。

いま私は、野々垣さんの誘いがあって、元宮教大の田中武雄さんと3人で三島さんの関係者の聞き取りをおこなっている。まちがいなくこの本の発展と言える。

困難と向き合って道を拓いた人の話を
知る意味は大きい。もちろん三島さんに
限らず戦後教師の生き方を今とこれから
をどう切り抜けるかの示唆を得るために
もこの本をぜひ手にとってほしい。

(かすが)



企画 民主教育研究所

定価 (本体2281円+税)

【問い合わせ先】

みやぎ教育文化研究センター

センターの動き

↑1ヶ月

5日・6日 冬の学習会
センターの講座を2コマもつ。

9日 清岡さん、上映会の打ち合わせで学生の集まりに出かける。

11日 今年初の事務局会議。公開授業についての役割分担。フォーラム2「成績つてー」について、話題提供者も決める。

12日 東北大学の学生主催による「かすかな光へ」上映。大田亮さん講演会。用意したイスはほぼ埋まる。学生たちの充足感、見ていて気持ちよし。

15日 4時から会館の職員会議。

19日 戦後教育実践書を読む会第4回「村を育てる学力」。案内人は佐藤正夫さん。

20日 高校生公開授業。仲本正夫さんの数学。生徒は約30名。授業は最後の実験ですっかり伸びやかに。

22日 「体が震えた」という授業の感想あり、これで満足。

25日 事務局会議。公開授業の総括など。

26日 田中孝彦さんたちとの石巻調査。大荒れ。電車で行く。高校生の座談会。教師仲間、仮設住まいの方などの聞き取りなど。

2日 朝、石田一彦さんが亡くなったという訃報入る。センター

↑2ヶ月

2日 子どもを考えるフォーラム2回目。テーマは「成績つてなんだろう」。話題提供者は4人。それぞれの話は角度が違いおもしろかった。

4日 3月2日のセンターのつどいの案内をハガキで出す。

6日 高校生への礼状書きを終える。

8日 事務局会議。フォーラムの感想交換と第3回のもち方について話し合う。

9日 午前の生活科例会からまっすぐ石田一彦さんのお別れ会場。

12日 高校生の公開授業受講者への礼状をやつと発送。

13日 13年度予算を2人で話し合つて、会館に提出。

14日 広瀬小5年生全員で取り組んだ地域の「龍神伝説」の発表会のリハールを見せよう。

15日 教育委員会編集「宮城県教育百年史」第2巻から、「菊池譲と国語教育研究」に関する部分を別冊に使わせてもらうため教育委員会宛に転載使用願い書を書く。

18日 「雑誌「教育」読む会。鳴瀬二中への聞き取り。10時から。午後、ヤスパス読書会。

20日 会館に来年度の委員会新設の開設構想を出す。通信別冊内容4本かたまる。

22日 きた出版と70号の打ち合わせ。事務局会議。センターのつどいとフォーラム第3回目についてがメイン。

↑3ヶ月

2日 10時半から宮教組の震災本出版「執筆者への感謝のつどい」に出席。1時半から「センターのつどい」。だいたい予想どおりの参加者か。4人にセンターへの提案をしてもらい、その後参加者も交えての意見交換。センターのためにいろいろな話が出され、大いに意味あり。

4日 千葉さん、筒井さんから原稿が届く。10時から東北大との打ち合わせ会。今年度の報告と年度内やるべきことを話し合う。もうひとつ、3年度の来年度をどのようにするか話し合う。大きな連筋はできる。

6日 人事案件についての運営委員会小委員会。穴戸さんからDVDで原稿が届く。きた出版と別冊の校正と全体を話し合う。考えること多く、今後の仕事のイメージが広がる。

8日 事務局会議。達郎さんから「ひと言」の原稿入る。

18日 雑誌「教育」を読む会。15時から第2回運営委員会。

21日 橋浦・吉浜・相川3校の聞き取り。

23日 フォーラム第3回「子ども時代を生きるということ」

23日 戦後教育実践書を読む会第5回「体育の子」。案内人は矢部英寿さん。学生3人入る。

28日 県教委から百年史転載使用許可の正式電話が入る。